

連続する特徴 - 長野県の不可解な植物たち -

藤田 淳一*

はじめに

フィールドを歩いていると、いろいろな植物を目にする。目にした植物の名前を図鑑で調べるという作業は、植物に関わる人であれば、ごく自然に行っている作業である。そして、様々な種の特徴を覚えていくうちに、同じ種であれば、初めて訪れる場所でも簡単に名前が分かる。そんな風になれば植物の名前に悩むことは無いだろう。しかし、それは理想であり、詳しく見れば見るほどわからないものが増えていくという厳しい現実がある。その原因として、ある種とある種の特徴の境界が不明確である場合や、図鑑に書かれた特徴がきれいに当てはまらないというのが挙げられる。今回は長野県における不可解な植物たちに焦点を当てていくつかの事例を紹介する。

不可解な植物たち

シシウドの正体

7月の梅雨明け、高原の草原を散策するとたくさんのシシウドが開花している。シシウドは他の草本植物に比べ抜きん出て大きく、花が白く大量に咲かせることから、誰の目にも留まるし、本格的な夏が来たと感じるだろう。ここで本当のシシウドの花期は9～11月だという話をしたらどう思うだろうか。本来シシウドは秋に開花する植物である。夏に咲いているものの葉裏が無毛であれば、本誌49号で報告したミチノクヨロイグサの夏咲きのものと言える。ミチノクヨロイグサ(図1)の葉裏は無毛であるが、高原のシシウドの葉裏はびっしりと長軟毛が密生している。シシウドとミチノクヨロイグサは、分類学上別種であり、典型品は各部の特徴から容易に区別が可能である。ところが、シシウドとミチノクヨロイグサは中間型で連続し、葉裏の毛について、県北端部は無毛、その他は有毛であり、毛の量は多いものと少ないものがモザイク状に生育している。セリ科の分類において重要とされる果実の脈の間を走る油管数も県北端部はほぼ1本、その他は1



図1 新産報告からわずか1年。実はシシウドと交雑するシシウドと同じ種群ではないかと指摘されるミチノクヨロイグサ

個体の中で1本～3本と特に決まりがない。色々な形質を調べた結果、長野県の大部分のシシウドと呼ばれる植物はシシウドとミチノクヨロイグサの間に該当するものであり、シシウドに近いものからミチノクヨロイグサに近いものまで存在するため、極端なものを除いて区別できないということがわかった。厳密な意味でのシシウドの分布は伊那谷南部、木曽谷南部のみといえる。現在分類学的再検討を愛知県の芹沢俊介氏、渡邊幹男氏、小田祥一朗氏とともにやっている最中である。

種の間を揺れ動くアザミ

アザミの同定は難しい。どこか1つの特徴で同定しようとする正解にはたどりつかない。総苞片の列数、腺体の有無、花の咲き方(上向きか點頭するか)、葉の付き方、葉の基部の茎の抱き方などの特徴を総合的に見ていけば正解に近づく確率が高い。しかし、総合的に見ていっても同定ができないものがかなりの頻度で存在する。

木曽谷南部では、湿地脇にリョウノウアザミと思しきアザミが生育している(図2)。花期に根生葉

* 藤田淳一 〒390-0313 長野県松本市岡田下岡田243-2
サープラス1アルプ203号



図2 茎葉がよく発達し、頭花はスズカのリョウノウアザミ



図3 頭花はナンブで高さ2mに達し、湿地に生育しないヤチアザミ

が宿存し、花柄が長いなどの点はリョウノウアザミと合致する。一方で茎葉が多数つく点でリョウノウアザミと断じるには違和感がある。さらに頭花の形や総苞片列数が9列程とリョウノウより少ない点でスズカアザミのようでもある。両種の雑種だろうが、この形のものだけで繁殖し周辺に実生がたくさん存在する。

大町市や上田市菅平周辺の山の斜面には、高さ2mに達し、頭花が點頭するナンブアザミに似たアザミが存在する(図3)。しかし明確な地下茎が発達し、葉の基部が茎を抱く点でヤチアザミなのである。ヤチアザミは頭花が直立するはずだ。このアザミに対して奥原弘人氏は、ナンブアザミ×ヤチアザミと推測し、オオマチアザミという名称を与えている。私もこの雑種であるという考えを持つのだが、前述のリョウノウアザミもどきと同様、この形のみが周辺に群生し、実生も多数存在することから、種子繁殖を行っているものと考えられる。

恐らくアザミ属は、進化の歴史の中でつい最近一気に種分化し、分化の程度が浅いと考えられる。そのため、今まさに2つの種に別れつつあり、両者の中間型がまだ残っている、若しくは、一度別れた種が交雑しても稔性を持っているという状態が当たり前のように起きている。そのことが、ここで紹介したような雑種のようなでありながら、稔性を持ち、独自に種子繁殖している状態を作り出しているのではないだろうか。

長野県に狭義シナノオトギリは存在するか

亜高山帯のお花畑でよく見かけるシナノオトギリ(図4)。別名ミヤマオトギリで山登りをする人は慣れ親しんでいるオトギリソウだ。イワオトギリとは亜種関係で、シナノは葉縁部のみに黒点が存在し、イワは葉面にまで黒点が存在するとされる。長野県内で今まで葉縁のみに黒点があるものを見たことがない(図5)。典型的なイワオトギリは葉縁部、葉面部に密に黒点があり、生育地が岩上であることが多い。長野県でシナノオトギリと呼ばれているものは、イワに比べると圧倒的に葉面の黒点が少ない。この少なさを決め手にして同定していた。しかし、石川県の白山に行った際に、シナノオトギリを見て驚いた。黒点は葉縁のみで図鑑通りの特徴なのだ。和名も学名も「シナノ」を冠する植物の本場が実は一番分からない状況なのである。普段見るシナノオトギリはイワとの移行帯なのか？とすると長野県に狭義シナノオトギリが存在するのか、しないのか、いまだ解決していない。

オオイタヤメイゲツのようなハウチワカエデ

ハウチワカエデといえば、カエデ属の中でも初期に覚え、他種と迷うことがない人に優しいカエデであった。なぜ過去形なのかというと、よく見ていくと、時々オオイタヤメイゲツのような特徴を有したものがあつた(図6)。具体的には、葉柄がほぼ無毛で長く、葉脈が一度合着してから放射状に出て



図4 亜高山帯高茎草本群落ではおなじみのシナノオトギリ（中央アルプス）



図5 葉縁のみではなく、葉面にも黒点が点々とある（矢印）

いくのだ。そして、まれに葉脚部分がU字型に貫入するという特徴を持つ（図7）。典型的なハウチワカエデは葉柄が有毛で短く、葉脈は合着せずに葉の基部から放射状にでて、葉の基部は心形となりU字型に貫入することはない。この中途半端なハウチワカエデは、日本海側と太平洋側両方の植物が混生する場所で見かける。今のところ、ハウチワカエデという他ないのだが、オオイタヤマゲツとの分布境界で極稀にみかけるあたり、両種が一部で混じり合っているのではないだろうか。

おわりに

これまで複数種の特徴が連続している例や複数種の特徴を持つ植物の例を挙げた。進化というものを信じるのであれば、横軸に時間を、縦軸に何らかの形質を配置したグラフの一切片に我々が暮らしていることになる。とすれば、種分化は過去完了形ではなく、今まさに種分化しようとしているものや、一度分化した種が再合流しているものがあるとおかしくない。だからこそ、図鑑では説明できない特徴を持つ植物が存在している。それが面白さであり、難しさであるのだと考えるようにしている。今回の話は読者を混乱させることが目的ではない。身近な植物でもよく見るとまだまだすっきりとしないものでありふれているということを示したかった。図鑑や論文の情報が全てではなく、実は分類学という学問はまだまだ発展途上で、我々アマチュアの立場から分類学の世界に話題を提供できる可能性をはらんでいるのだ。一寸した疑問や発見を研究会誌に投稿し、残しておくことで、将来の大きな発見の端緒となる可能性も十分にあると考える。



図6 葉柄が長く、葉脈の基部が合着するハウチワカエデ

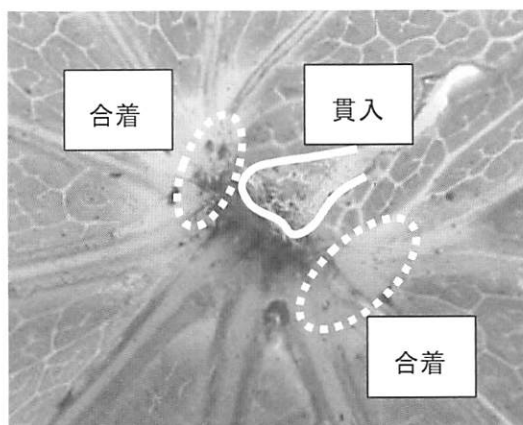


図7 葉脚部分がU字型に貫入し、葉脈基部が合着している